



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	基幹民族によるロシア語併用：ビシュケク市におけるコード・スイッチング現象を中心に
Author(s)	小田桐, 奈美; ODAGIRI, Nami
Citation	日本中央アジア学会報, 19, 46-47
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.46
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94171
Type	journal article
File Information	JB19_010odagiri.pdf



基幹民族によるロシア語併用⁽¹⁾

—— ビシュケク市におけるコード・スイッチング現象を中心に ——

小田桐 奈美

公開パネル「現代中央アジアにおける言語をめぐる諸問題——国家語・ロシア語・マイノリティ言語——」は、現代中央アジアにおける言語をめぐる論点の整理を目的に企画したものである。ソ連崩壊後の基幹民族中心の国家建設の過程では、各基幹民族語の国家語としての普及や、ロシア語にどのような地位を与えるのかが、重要な争点となった。前半の徳永・小田桐報告は、それぞれウズベキスタンとキルギス共和国(クルグズスタン)における国家語とロシア語の問題を検討するものである。一方で、近年はマイノリティ言語に注目する必要性も指摘されている。後半のタスタンベコワ・櫻間報告は、それぞれカザフスタンにおけるマイノリティ言語と、複数地域のタタール人を対象とするものである。ディスカッションでは、ソ連崩壊から30余年が経過した今、新たな論点や問題が生じているのか、また近年の世界的な出来事の影響の有無についても議論した。

小田桐による報告は、ビシュケク市で頻繁に観察される、キルギス語とロシア語のコード・スイッチング(CS)現象を検討するものである。CSは、一連の会話の中で複数の言語を織り交ぜながら併用する現象であり、様々なレベルで起こりうる多言語併用の中でも、特に動的なものである。社会言語学を中心としたCSに関する研究全体の傾向として、移民コミュニティなど、特定の国・地域におけるマイノリティを対象としたものが中心であることが指摘できる。一方、キルギス語とロシア語のCSは、主に基幹民族であるキルギス人の間で頻繁に観察されることが大きな特徴である。

キルギス語とロシア語のCSは、政治の舞台でキルギス語普及の障害として批判されることもある。CS現象の存在自体は、現地の一般の人々によっても「混ぜる話し方」として広く

(1) 本報告の内容は、主に次の拙稿に基づいたものである。小田桐奈美 2015『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」——国家建設期のキルギス共和国における言語と社会——』大阪：関西大学出版部。小田桐奈美 2016『キルギス語とロシア語のコード・スイッチングに関するパイロット研究』『関西大学外国語学部紀要』15、21–32頁。Odagiri, Nami 2020. "Patterns and Features of Kyrgyz–Russian Code-Switching in Bishkek," *Bulletin of the Faculty of Foreign Language Studies* 23, pp. 21–41. また、本報告は JSPS 科研費 JP16K16668 の助成による研究成果の一部である。

認知されているが、その詳細は学術的に解明されてこなかった。そこで本報告では、現地で収集した談話データや自然会話の観察記録を基に、キルギス語とロシア語のCSの実態を、①パターン・特徴、②機能、③CSに対する態度の観点から明らかにした。

① CSのパターン・特徴

6つのペアを対象に収集した談話データに基づき、1つの会話内におけるCSをさらに詳細に見ていくと、発話ターンや文間、文内など、様々なレベルでCSが発生していることが明らかになった。また、文内CSをさらに挿入・交代タイプに分類し、キルギス語とロシア語のCSに特徴的なパターンを提示した。

② CSの機能

初期のCS研究では、CSが言語能力の不足を示すものとして否定的に捉えられることもあった。本報告では、CSが必ずしもキルギス語能力の不足を意味せず、言語的な相互行為において重要な機能を果たす例を示した。(1)言語を切り替えることにより、特定の人を会話に巻き込んだり、逆に会話から排除したりする「方向づけ機能」。(2)ビシュケク在住者にとっては、CSに満ち溢れた会話様式がありふれたもので、CSを通して、キルギス語が優勢な地方在住のキルギス人とは異なるアイデンティティを表現している可能性(2言語を併用することにより、混合アイデンティティを表現する「表現機能」)。

③ CSに対する態度

報告の中では、ある国会議員がCSを「キルギス語に対する侮辱」として表現した例を紹介した。談話データ収集の協力者を対象にした調査の結果からは、CSに対する複雑な態度が浮き彫りになった。日常会話においては概ね肯定的だが、特定の場では避けるべきだと考えられることもある。

最後に、キルギス語とロシア語のCSについて、今後注目すべき点について述べておきたい。冒頭部で指摘したとおり、キルギス語とロシア語のCSは、マイノリティよりも基幹民族であるキルギス人の間で頻繁に見られることが特徴である。また、キルギス語優位のキルギス人による、ロシア語優位のキルギス人や他民族に合わせたCSも一般的である。その一方で、近年は意識的にキルギス語を使ったり、CSを避ける試みがなされたりする例も見られる。そのような中で、基幹民族であるキルギス人が相手に応じてロシア語に切り替える現象は、今後も続いていくのだろうか。また、マイノリティによるキルギス語とロシア語のCSが一般的になる可能性はあるのだろうか。誰が、いつ、どのようにCSしているかは、言語や民族間のパワーバランスを理解する上での重要な手がかりとなるだろう。

(関西大学外国語学部)